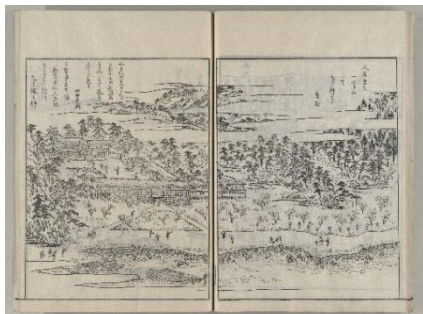


平賀周蔵の詠じた宮島の楽しみ

宮島に関する漢詩を網羅的に収録する『芸藩通志』芸文五から同七までの中で、最も多くの作品が採られているのは、江戸時代の安芸の漢詩人、平賀周蔵(1745-1805)である。作品数が多いなら、きっと何か面白いことが見つかるだろう。そう思って、全二十九首をひとつおとり通読してみた。

まず惹きつけられたのは、中国古典との自在な戯れである。たとえば、石風呂に入った体験を詠ずる長篇の詩「巖島に洞窟有り、六七人坐す可し。薪を焼き潮を澆ぐ。人の疾有りて就きて治を取る者は日に数十人。余も亦た焉に試みるに、旬余にして旧痼の頓に癒ゆ。戯れに歌を作りて其の状を記せば、其の語は俗に近く、其の調は俳に類す。亦た唯だ昼間の無事なるとき以て消閑の興を遣るのみ」(『芸藩通志』卷三十二)の中で、燃え盛る薪の炎を前に詠じた「莫是玉石俱焚灼」という句。これは、善悪の区別なく害を被るという意味を表す、『書経』胤征にいう「火炎崑岡、玉石俱焚(火は崑岡に炎え、玉石俱に焚く)」に基づき、これに「莫是」という俗語的な言い回しでひねりを加え、「まさか玉石と一緒に焼かれているのではあるまいな」と言っているのである。儒教の経書を用いて大真面目に詠じているのが可笑しい。そうして、蒸し熱さの極致から出てくれば、『莊子』逍遙遊を踏まえて「俗も是れ冷然として風に御りて行くがごとし」と囁く。

『莊子』に限らず、平賀周蔵の宮島詩には、道家や神仙の思想を下敷きにした表現が少なくない。そして、そうした表現は、いわゆる巖島八景のような名所から少し外れた、隠れ家的な場での交遊を詠じた詩に散見する。これは、彼が幾たびも宮島に足を運び、観光客とはひとつ異なる姿勢で、当島の人々と深い交友を結んでいたことを物語っているだろう。その友人たちや庵などの場所が特定し難いという困難はあるのだが、この謎もまた彼の詩が人を惹きつけるところである。



「石風呂」<『芸州巖島図会』卷三、
天保 13 年(1842)>



「石風呂」(左図の拡大)

(柳川 順子)

(「宮島学センター通信」第 13 号・2022 年 3 月)